

第 24 回シンポジウム「高齢社会を共に生きる」の

記念・実践報告要旨

「高齢者が最期まで豊かに暮らせるまちづくり」

—地域に根ざした総合施設を拠点にした展開—

山田 尋志（高齢者福祉総合施設ももやま園長）

高齢者福祉総合施設「ももやま」は平成 12 年 9 月、京都市伏見区において、障子や襖で仕切る「準個室」ユニット型特別養護老人ホームとして、介護保険制度とほぼ同時にスタートした。1 階の地域レストランや交流スペースを挟んで高齢者デイサービスと児童館を配置し、小学生による「昭和路地裏作戦」を展開してきた。15 年からは、「ももやま」を拠点にして、京都市内に 9 か所のサテライトを展開し、在宅を支える新たな仕組みと住民参加を目指してきた。

「思い出を描いた絵図による認知症予防・対策事業」

—ふるさと絵屏風を用いた回想法で地域のまちづくり—

馬場 八州男（高島市社会福祉協議会事務局長）

滋賀県高島市の各地において盛んに制作されている「ふるさと絵屏風」を活用した回想法を、介護現場や地域のサロン等で実践し、介護予防、認知症ケアならびにまちづくりへと活かしていくことを目的に取り組みを進めた。具体的には、「思い出ガイドの養成」「介護現場や地域のサロンにおける実証調査」「回想法キット・回想法センターの整備」「高齢者が社会参加できるプログラムの開発（次世代への語り部として小・中学校へ派遣する等）」などを実践してきた。

「超高齢化地域における持続可能で困らない集落運営システム」の 実現を目指した支援態勢の構築と事業化

藤槻 篤範（NPO 法人ひろしまね理事）

超高齢化した広島県三次市作木町において、高齢者世帯の全戸聴き取り調査によって集落運営や生活支援の諸課題を整理し、行政に依存しない持続可能な集落運営や生活支援の仕組みづくりに取り組んだ。具体的には、お出かけツアーや逆デイサービス等を通じた「高齢者の引き籠もりの解消」、健康教室や安否確認システムの構築等を通じた「高齢者の生活支援」、高齢者の知恵や経験を活かす体験交流活動や農産物加工等を通じた「コミュニティビジネスの展開」などを試行した。